

令和4年度「一般選抜後期日程試験（個別学力検査・小論文）」講評

後期小論文課題における出題の意図

今回の出題は公立大学が観光振興に期待される役割について述べたものである。そこから学生たちが大学において、複数の分野の学問を相互に関連付けながらどのように学び、今後の社会での活動等にいかに関与していくのかを考察することに主眼を置いたものであった。2つの課題は、問題文を適切に読み取ることができるか、特に、「対象の多様性」と「方法論の多面性」という2つの領域横断性の意味を的確に理解できるか（課題1）。また、その上で、今ここにある危機（現代社会の課題）に対してどうするのかを考え続けるプレイヤーになるための望ましい学びについて自らの意見を論理的に述べることができるか（課題2）を問うたものである。

本学は「現代社会の課題の探究と解決に主体的に取り組む姿勢を持つ人」を求めている（アドミッション・ポリシー）。一般選抜後期日程小論文課題では、受験生が公立大学の学生としてどのように学び、現代社会の課題解決にどのように取り組むことが望ましいと考えているかを問うことによって、課題の探究とその解決に主体的に取り組む姿勢を評価しようとしたものである。

課題1の評価ポイント

受験生の多くは「対象の多様性」と「方法論の多面性」について適切に説明できていたが、これらの内容を理解できていないと思われる受験生も散見された。これら2つの領域横断性を対比して把握することが問題文全体を理解する上で重要である。

前者は旅行産業、宿泊産業、運輸産業、テーマパークといったさまざまな領域を分析対象とするという意味での領域横断性であり、公共政策学における「inの知識」に対応する。後者は観光という複雑な要素で成り立つ営みを分析するための領域横断性であり、公共政策学における「ofの知識」に対応する。著者は組織論、社会心理学、意思決定論などが観光学に埋め込まれなくてはならないと主張している。

2つの領域横断性の意味を理解した上で、地域の危機的状況に適切に対応するには、「対象の多様性」ではなく「方法論の多面性」が必要であり、また「inの知識」ではなく「ofの知識」が必要とされることが示されているかどうかを評価した。

課題2の評価ポイント

問題文に、「課題1の公立大学の教育方針のもとで、筆者が考える公立大学の学生としての歩むべき道筋とは何かを読み取って、あなたならどのように学び実践していくのが望ましい、と考えるのかを論理的に述べてください」と明記しているのであるから、課題1の「対象の多様性」と「方法論の多面性」について具体的な事例を掲げながら、各受験生が社会の諸問題に関して、どのような種類の分野の学問（高校までの科目でもよい）を必要とし、さらに、かつ、実践することが可能なのかを回答してほしい。ところが、課題1と課題2を別個の問題として捉える受験生が多く、ここで大きく評価が分かれた。問題文を正確に読むことが強く求められる。